

# 保育の体験と思索

## —子どもの世界の探究—(十八)

津 守 真

### 四歳児の冬——三学期の遊び

#### 穴を掘る

一月十七日

四歳児の秋には、子どもは友だち同士で遊ぶことの面白さを味わいはじめたことを、いろいろの機会に保育の中で、私自身、体験してきた。三学期も、秋から継続して、友だちと楽しんで遊んでいるが、寒い季節であることも加わったせいであろうか、じつくりと遊びを楽しんでいることが多いように思われる。そんなに華やかな遊びではないけれども、ひとつひとつに目をとめてみると、子ども自身は、何か実質的な体験をしている。

寒い日で、庭に出ている子どもは少なかった。

隣の組の子どもたちが二人砂場に出ていた。砂を長いシャベルで掘っている。一人が「地下を掘る」と言っている。私も傍で砂を掘りはじめた。私が掘っていると、もう一人の子が、「手伝ってるの?」とたずねるが、私も「ちがうよ、地下を掘ってるんだ」と答える。地下を掘った砂の堆積が、だんだん大きく高くなる。

SとShが室内から出てきた。私の隣で、シャベルで砂山をつくりはじめ、私に「手伝え」と言う。前から地下を掘っている子たちの砂山をたえず気にして、横目で見ており、「もっと高くなつたぞ」と比べたりする。地下を掘っていた子たちは、砂山を高くすることに、関心がないらしい。砂山に、木の枝などをつきさし始める。一時間くらい砂場にいたが、とても寒い。砂場には、これ以上子どもも集まらない。

寒い日で、午前中、四人の男児が砂場に出ていただけで、他の子たちは室内にいたのであるから、子どもでも寒くて、戸外では遊びにくかったのだろう。それにもかかわらず、朝から砂場に出ている子どもたちは、よほど砂場をすることに執着をもっていたと考えるとよいと思う。この子どもたちの執念は何なのだろうか。

シャベルで砂を掘っている二人の子どものうち一人は、「地下を掘る」と言う言葉を発してくれたので、この子どもは地下を掘ろうとしていることが私にわかる。現代の子どもにとっては、地下鉄、地下室、地下道などは、日常、親しみのある語であって、いずれも階段をおりていくところであり、昼間でも電灯がついていて空が見えないところである。また、地下鉄も地下道も、どこか未知の世界へ通じる道路でもある。地下という語は、「穴」と

いう昔からの日本語と共通の感覚をもっていると考えるとよいだろう。子どもは、シャベルで砂をすくい出して傍にその砂をつみ重ねる。穴を掘るには、同じ場所にくり返してシャベルを運ばねばならない。そして、目を同じ場所に注ぎ、力をこめ、心身ともにエネルギーを使わなければならない。子どもはこうして穴を掘り進める。おとなの目から見れば浅い穴であっても、子どもには、自分の力の出せる限りに掘れる穴は、地下の深い穴である。

私自身も、少年時代から、穴を掘る作業はいろいろとやってきた。開墾するときには荒地に穴を掘ってゆく。木の根を掘り起すときに掘る穴。壕を掘るとき穴。井戸を掘るとき穴など。力をこめて、シャベルで固い土を切ってゆくのは重労働である。固い石地にぶつかったときには、半日かかっても作業が進まないで、放擲したくなる。穴を掘る作業は、同じ場所を、またその周囲を、力をこめて、一足ずつ、掘り下げてゆく作業である。こうして地面に挑戦しているうちに、いつの間にか、そこに穴ができていく。あるところまでゆくと、比較的やわらかい土に達して、作業のはかどるところもある。そしてまた、大きな石にぶつかって、それをとりのけるのに一苦勞する。海に近いところだと、掘っているうちに、下から水が湧いてくるときもある。それは壕には適しないけれども、何か新鮮な喜びがあり、そこでひと仕事終



この特定の子どもたちが、この作業をしないではいられなかった、この子どもたちの負っている精神的課題にもう少しふれることができたかもしれない。しかし、この日だけのゆきずりの観察者にも、この子たちにとって何かたいせつなことが行なわれているのだろうということを理解できるし、その内容についておぼろげながらも推察することができる。

このことから、私は、庭に大きな穴をいくつも掘っていた知恵おくれの子どものことを思い出す。その頃、私は地面に穴を掘ることの意味を、全く理解することができなかった。母親から、庭中穴だらけにすることを訴えられたとき、私は何と言ってよいかわからず、多分、要領の得ないことしか言えなかったのだろうと思う。いま、その子どものことを考えるときに、毎日、庭に穴を掘らないではいられなかったその子どもが負っていた課題、その子がとりくんで解決できなかった課題があったに違いないと思う。安らぎを得る場所を探し求めていたのかもしれないし、何か別の世界への通路を探してエネルギーを使っていたのかもしれない。どんな行動にも意味があることを前提として、そのことを考えていたなら、もっと子ども自身の助けになったらうと思うし、親に対しても、一緒になってこの子のことを考える足場ができたろうと思う。

注1 本田和子『保育における経験や活動』（第一法規）には穴を掘ることの考察がよくまとめられている。

注2 穴という漢字は、屋根の下に、八印（入口の形）のあいた姿を示す会意文字である。（藤堂明保『漢字語源辞典』）すなわち、他界への入口を示す。

### 穴をつなげる

同じ日の午後、庭の砂場で、男児IとKとTとは、砂山をつくり、山の頂上から下に向かって穴を掘り、それから、山の横から横穴を掘る。Iは、「ここを掘っていくと、上からの穴につながるんだ」と言っている。しかし、横穴は下方に掘りがちで、水平に進まない。ついに成功しないままに終る。

穴を掘るのでも、この場合は、午前中とは違う。砂山の頂上から掘る穴は、容易に掘り下げられる。砂山をこわさないように、注意深く掘る。そして、横穴を掘ってゆくと、頂上からの穴にぶつかるといふ空間関係が把握されている。けれども、横穴を水平に掘るのはむづかしく、どうしても下向きになってしまう。掘る作業は下方に向うのが自然であるらしい。水平に掘るのには、特別に意志をはたらかせて、注意深くせねばならない。この

ときには、遂に穴を貫通させることに成功しなかった。この後、何度も、私はIとKとTとが、砂山に穴を掘って貫通させようとしているところに出会った。この三人の男の子は、どちらかというところ、他の子たちからははずれて、三人で遊んでいることが多いようである。砂山に、上や横から穴を掘って行って、貫通させる作業は、三人の間の気持を通じさせようとしているかのように思われる。砂山にトンネルを両側から掘って行って、これが貫通して双方の指先がふれ合うとき、何か相手と通じることができたように感じるであろう。努力の後に、指と指とがふれ合う体験は、言語で理解する以上に、人間相互のつながりを感じさせるものである。何人かの子どもたちが、山にトンネルを貫通させる遊びに熱中しているときには、トンネル遊びにとどまらず、その底には、互に通じ合う関係を作りあげる作業に従事していると考えよう。

## 一月三十一日

朝、私は部屋の前階段に腰をおろしていると、いろいろの子どもが、一寸私の膝に腰をおろして、しばらくして遊びにゆく。

女兒は、野球をしている年長の子どもたちのわきで、野球を見

ながら、その子たちと何かしゃべったり、動きまわったりしている。mは、自分ひとりの世界の中にいるようなことが多かったから、年長の男児たちの遊ぶのを見ているとは、ずい分か変わったものだと思う。

まもなくmは、なわをもってきて、なわとびをしようと、私と二人とびをしたらしく、私もいろいろと試みるがうまくいかない。それから、自分がなわの一端を持ち、私に他の端をもたせて、なわをふる。それを見て、女の子たちが、次々に「いれて」と言ってくる、mは「こっちにいきましょ」と言って、私の手をひいて場所をかえる。いれてと言って並んでいた女の子たちは、何となく立ち去って、だれもいなくなってしまう。なわとびの遊びがもつとまとまるように、私が積極的に何か言った方がよかったように思う人もあるかもしれないが、私はむしろこれよかったのだと思う。mは、三歳のときから、おとなと二人だとうかったのだと思う。mは、三歳のときから、おとなと二人だとうまくいくが、複数の子どもとおとなと一緒にいることがむづかしい。それが子どもと一緒にいられることが少しずつ多くなり、またおとなと二人だけで遊び、その両極を揺れ動きながら、友だちの中に入れるようになっていく。この朝のような中間の状態があっても、少しもふしぎはない。移り行きの時期には、前の時期の行動と後の時期の行動とが混じり合ってあらわれるようである。

どちらかに割り切ってしまうことはできないので、両方があらわれてあたりまえと考えた方がよい。

いれてと書いて集まってきた子どもたちも、そのあそびがうまくつづかないとみると、だれも文句も言わずに、自然に立ち去るのもふしぎである。子どもたちの間で、お互いの状態をよく心得ていて、自分たちの間で自己調節しているように思われる。

## けむり

まもなく、I、K、Tが、通りがかりに、土だんごを私に見せ、一緒に山にいつてくれという。私は一緒に山に走ってゆく。山の上の土は、埃のような土である。I、K、Tは土だんごに埃土をまぶして、つやが出たと言って私に見せる。土のだんごは、本当に光っているところがある。そのうちに、その埃土を投げ、けむりだと言って大声を出し、みんなで埃土を投げはじめた。一時はあたり一面、土ぼこりがもうもうと立ちこめた。私はこれは何かイメージを伴ったことのように思えて、とめる気にもならず、じっとしていた。しばらくして、子どもたちは走り去って、あたりは誰もいなくなった。ここでも、子どもたちは、私と遊ぶのではなく、子ども同士で何かを楽しんでいることがわか

る。そして子ども同士で一緒に遊びながらも、そこには子どもの内的イメージがある。

土埃を投げて「けむり」と言うのは、こまかい砂塵が空中に舞い、しばらく空中にとどまって浮動する様が「けむり」に似て見えるからであろう。けむりは、火が燃えることに伴う現象であって、ふだんは子どもが容易につくり出すことのできるものではない。子どもは埃土を力をこめて空中に投げる。力をこめて投げる動作は、そのはげしく放出するエネルギーにおいて、火に似ている。子ども自身の能動性においてつくられるのが、土埃のけむりであるとも考えられる。子どもは、土埃を空中に投げることによって、現実には子どもが関与することを許されない火をつくり出し、空に立ち昇る煙を生み出している。それは偶然の機会にはじめられ、一時はどうなることかと思っても、ひとしきりの後には終ってしまう束の間の遊びである。一瞬のことであるけれども、こういうところに、子どもの遊びの本質があるのだと思う。

## 高い所と低い所

走り去ってゆく男の子たちの後を追ってゆくと、すべり台の上で女兒に呼びとめられる。トンネルになった傾斜面に、ごさがし

き並べられている。私はmに言われて、傾斜面の上の方に坐る。日かげでもとても寒い。うば車に人形がねかしてあるが、おうちこっこをしているというのでもなさそうである。mは傾斜面の下から、水の入ったバケツを持って上ってこようとす。「できない」と言いながら、ようやくバケツを持ち上げてくる。そんなことを何度もくり返している。

傍のすべり台では、男児I、K、Tが頂上に乗ってはさかさすべりなどしている。私にも上ってくるように言うので滑り台の頂上の上って立つと、とても高いところに入った気がする。子どもたちも、とても高いところに上ったことを楽しんでるようである。三人で一緒になって走りまわって遊んでいるのであるけれども、その遊びにはごっこ遊びのような脈絡があるのではなく、そのひとこま、ひとこままで、物質のイメージや空間のイメージを楽しんでいるのである。

mが私を呼ぶ。トンネルの傾斜面の下で、私に横になるようにいう。私はねころがると、青空がみえる。そこに男の子が上からのぞきこむ。自分が高いところに入った感じとは違う。地面に横たわって、遙かに高い天の青空を仰ぎ見る。自分が低いところに横たわっているが、天の高さを一層際立たって感じさせる。

子どももこうして、高いところの上って立ったり、低い地面に

横たわって高い空を望み見たり、こういうことをくりかえして、自分自身の内的世界に、天と地の認識も明瞭にしつつあるのであろうと思う。それは単に、空間関係の知的認識にとどまらない。それも含みながら、自分の生きる精神世界の天と地とその間にひろがる世界を感得し、更に拡大して言うならば、仰ぎ見る天の高さと、地につく人間の低さを学んでいるとも言えるのではないかと思う。

四歳児の冬学期の、身のひきしまるような寒い戸外での遊びにつき合って、この子どもたちが、敢て寒い戸外で遊ぶだけのことがあると思った。

(つづく)

